

パラドクスとしての福音

～セバスティアン・フランク『パラドクサ』をめぐって

中井章子

〔キーワード〕 セバスティアン・フランク、『パラドクサ』、パラドクス、霊、聖書

1. はじめに

セバスティアン・フランク (Sebastian Franck, 1499?-1542) は、ルター (1483-1546) の同時代人であり、宗教改革後の多様な流れのなかで、非党派、不偏不党を主張した思想家である。カトリックとルター派の聖職者を経て、再洗礼派や当時のさまざまなセクトや個人と接点をもったが、いずれの教会やグループにも属さず、検閲や妨害のなかで執筆し、著書や翻訳を出版する作家となった。著作をとおして、のちのヴァイゲルやベーメのような思想家、ピエティスムス (敬虔主義) と呼ばれる流れに影響した。この系譜は18世紀末の哲学 (カント、ドイツ観念論など) や文学 (ゲーテ、シラー、ノヴァーリスなどロマン主義) につながる。フランクが提起した問題は、「世俗化」した21世紀現代のアクチュアルな問題にも触れてくる。本稿では、フランクの『パラドクサ』の、とくに「序文」に基づいて、フランクの思想を検討したい¹⁾。

2. フランクの生涯

まず、フランクの生涯を『パラドクサ』理解のために、概観しよう²⁾。フランクは、1499年か1500年に南ドイツの帝国直属自由都市である、ドーナウヴェルト Donauwörth に生まれた。ラテン語学校で教育を受けたのち、インゴルシュタット大学で教養課程を修める。1518年からは、ハイデルベルクのドミニコ会学寮で神学を学んでいる。学友にブツァー (Martin Bucer, 1491-1551) やフレヒト (Martin Frecht, 1494-1551) がいる。彼らはのちにそれぞれストラスブルグやウルムの宗教改革者となり、フランクとは対立することになる。1518年4月にはルターの「ハイデルベルク討論」に、フランクも出席していたであろうと推測されている。大学修了後に、カトリックの聖職者 (アウクスブルク司教区) になったが、詳しいことは不明である。

1524年には、ニュルンベルクの市会Ratから派遣されてルター派教会の副牧師となる³⁾。ここでは、フランケン地方の農民戦争 (1524-25) 関係者や、ニュルンベルクのデンク (Hans Denck, 1500頃-1527) のような思想家や、デューラー (1471-1528) の弟子の画家ベーハイム兄弟 (Barthel Beheim, 1502-1540; Sebald Beheim, 1500-1550) と交流があった。1528年には、ベーハイム兄弟の姉妹と結婚。1528年には、デンクを批判している牧師アルトハマーの「一

見矛盾して見える聖書の諸論点の統一」をめぐるラテン語の書物をドイツ語に翻訳している。ルター派の副牧師になったということは、まずはルターに共感していたと思われる。

ところが、1529年ころには、牧師職を辞し、以後、物書きとして生きていくことになり、ニュルンベルクに移り住む。ニュルンベルクで『年代記、時代の書、歴史聖書 Chronica/Zeytbuch vnd geschycht bibel』(1531年刊、以下『歴史聖書』と略す)、『忌まわしき酔払いの悪習について Von dem grewlichen laster der trunckenhayt』(1531年刊)や、翻訳の『トルコ年代誌』(1530年刊)が執筆されている。『トルコ年代誌』にフランク自身がつけた付録の部分においては、「ルター派」「ツヴィングリ派」「洗礼派」に次ぐ「第四の信仰」、すなわち「外的な」説教、儀式、聖礼典などを「不必要 vnnoetig」とする「目に見えない、霊的な教会」が始まっている、と述べている⁴⁾。『歴史聖書』の「異端列伝」では、「肉のこの世に抗う霊の人」としての「異端者」を取り上げている⁵⁾。このような「異端者」観は、のちのアーノルト (Gottfried Arnold, 1666-1714) の『教会と異端の非党派的歴史』に見られる観点である⁶⁾。

1530年終わりか1531年初めころにフランクはストラスブールに移る⁷⁾。この時期のストラスブールはさまざまな洗礼派、非正統派の人々が亡命する土地になっていた。フランクがシュヴェンクフェルト (Caspar von Schwenckfeld, 1489-1561) との交際があったことが確認される⁸⁾。当地において1531年に『歴史聖書』が出版され、フランクは世に広く知られ、以後、危険人物と目されるようになる。『歴史聖書』の、第3巻の教会史、第3章の「異端列伝」に入れられたエラスムスが、『歴史聖書』の出版を市に抗議したということもあり、フランクは1531年末には獄に入れられ、ストラスブール追放となった(1531年)。フランクは、しばらく、ストラスブール近くのケールに滞在したのち、エスリンゲンに移り、石鹸作りの仕事に携わった。このころ、世界地理を扱った『世界の書 Weltbuch : spiegel vnd bildniß des gantzen erdbodens』(1534年刊)が執筆され、エラスムスの『痴愚神礼讃』のドイツ語訳(1534年刊)がなされている。後年、ヴァイゲル (Valentin Weigel, 1533-1588) は『世界の場所について』において、『世界の書』をしばしば引用している。

フランクは1533年8月にウルムに移り、1534年には、ウルムの市民権を与えられている。この時期に上記の『世界の書』や『痴愚神礼讃』訳や『パラドクサ』が出版された。ウルムからは追放になったり、追放取り消しになったりした挙句、1539年には最終的に追放されることになる。このとき、シュヴェンクフェルトも追放されている⁹⁾。この時期には聖書や古典からの抜粋である『金の箱舟 Die Guldin Arch』(1538年刊)や、「ドイツ人が書いた最初のドイツ史」とされる『ドイツ年代誌 GERMANIAE CHRONICON』(1538年刊)が出版されている¹⁰⁾。

1539年にフランクはバーゼルに移住する。この間、妻が亡くなり、フランクは5人の子どもとともに遺される。バーゼルでは、印刷の仕事に携わり、1541年には市民権を獲得し、印刷業ギルドに加盟している。フランクはこの時期に『ことわざ格言集 Sprichwörter』(1541年刊)、『平和のための戦いの書 Die Kriegsbüchlin des frides』(偽名で1539年刊)などを出版している。1541年には、『歴史聖書』を出版したバルタザール・ベックの義理の娘と結婚したが、1542年10月終わりには、亡くなってしまう。

以上のように、フランクは、ルターの始めた宗教改革が、さまざまな流れを生み、農民戦争や「ミンスター千年王国」(1534-35年)¹¹⁾などの運動が政治的に抑えられ、ルター派の中で「アウクスブルク信仰告白」(1530)などにより、教義や制度が確立していくなかで、「非党派性」を訴え、著作によって同時代や後世に影響していくこととなる。

2. 『パラドクサ』の題

本書のタイトルページには、何行にもわたって、以下のように記されている。

PARADOXA DUCENTA OCTOGINTA.

すなわち280のパラドクス、驚きの語り Wunderrede, 聖書の謎のことば Räterschaft. すべて肉にとっては信じられず、真実でないが、全世界の意見と見解に反して、確実に真実。神の内にて哲学するすべてのキリスト者の正しい神学的哲学、隠されたパラドクス wunderreden と神秘に満ちたドイツの神学。ありとあらゆる疑問の理解と聖書の一般的な言い回し gemeine sprüche に関して。

すべての説教者と民の教師たちに。判断を研ぎ澄まし、聖書を解釈するためにきわめて有用で、必要不可欠。

ヴェルトのセバスティアン・フランクによって見出され、叙述され、公にされる。

霊的である者、その人がわたしの語ることを判断するように。霊の火を消してはならず、預言を軽んじてはならない。すべてを吟味して、良いものを大切に保ちなさい。コリントの信徒への手紙Ⅰ、14章、テサロニケの信徒への手紙Ⅰ、5章。

この題には、第1に、本書が280の「パラドクス」を集めて、解説、解釈、説明を加えている本である、と記されている。フランクは日本語で「逆説」と訳すことのできる「パラドクス」をドイツ語で Wunderrede 「不思議な語り・驚異の語り・奇跡の語り」と訳している。「パラドクス」は、まずは、「肉」や「世」にとっては、真実でないと見なされるという、「真偽」の逆転構造を意味している。ルターは、フランクも出席していたと推測される「ハイデルベルク討論」(1518年)のテーゼを「神学的パラドクス Theologica paradoxa」と呼んでいる。この場合も、世の予測、常識に反するということであり、フランクの著書の題に影響したとも考えられる。

また、フランクにとっては、聖書はそれ自体、「なぞ」の言葉や矛盾した言説を含む「パラドクス」で、「解釈 Auslegung」ないし、謎の解き明かしを必要とする。

第2に題に述べられているのは、「神の内にて哲学するキリスト者 in Gott Philosophirenden Christen」の「神学的哲学 Göttliche Philosophy」という、著者フランクの姿勢である。フランクは、哲学でありつつ、その哲学者は「神の内」で思索し、「神的な哲学」を追及する。この態度はルネサンスの「敬虔な哲学」「知ある信仰」という、信と知の調和を求める立場につながる。

第3に、表題の「ドイツの神学」ということは、フランクがしばしば引用する『ドイツ神学』(ル

ターが序文をつけて1518年に出版¹²⁾)とのつながりを示すとともに、「ドイツ語」という民衆の母語で考え、書くという姿勢を示す。神学は従来、ラテン語やギリシア語でなされてきたが、母語であるドイツ語で書くということは、自分の日常の言葉で考え、書くということである。また、民衆に通じる言葉で書くという、民衆に対して開かれた姿勢をも表している。神学が、ラテン語やギリシア語を学習した専門家のあいだでの議論でなく、民衆に開かれたものとなるのである。フランクは『ことわざ格言集』を編集、出版しているが、ここでは、ギリシア・ローマの古典的な格言や金言や聖書の言葉とならんで、民衆の経験と知恵の結晶である「ことわざ」も、「知恵」のことばの結晶として等しく位置づけられている。

「聖書」は民衆語に翻訳されて、学者ではない幅広い読者にも読めるものとなったが、それは、教会のコントロールから離れて、それぞれ勝手に聖書を解釈するという道を開き、聖書解釈をめぐって、さまざまなグループが離合集散を繰り返し、過激な社会運動にも発展していくという宗教改革後の時代状況を生み出していた。フランクは、聖書を勝手に読むわけではないが、聖職者のコントロールや「信仰告白」の正統性に合致した枠の中でのみ読むというのでもなく、個人がみずから考えつつ読むという道を追求している。ここでは「判断」や「解釈」という理性的行為が重視されている。

第4に表題から読み取れることは、判断や解釈という理性的行為が、神の「霊」につながる「霊」を根拠としているということである。「コリントの信徒への手紙Ⅰ」の14章は「異言」や「預言」を述べた文脈において、「霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう」(15節)、「物の判断については大人になってください」(20節)と、「理性」や「判断」という人の理性的能力の重要性を述べている。「テサロニケの信徒への手紙Ⅰ」の4章は、「御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神」(8節)にふさわしい「聖なる生活」(7節)について述べ、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」(11節)と勧めている。フランクの『パラドクサ』は逆説的な命題を並べ、それについてのフランク自身のコメントを付け加え、パラドクス解釈を読者自身の「判断」と「吟味」に委ねているのである。そして「パラドクス集」という著作スタイル自体、教えを述べたり、自説を体系的に叙述したりするのではない、フランクの姿勢を表現している。フランクを研究する者は、『パラドクサ』をテキストとして、フランクの「思想」をあるていど体系的に把握しようとするが、「霊」のあり方とも密接に関わるフランクの姿勢を忘れないようにすべきであろう。「霊」は『パラドクサ』を貫いて、「肉」や「世」と対立する原理となっている。

3. 『パラドクサ』序文

序文は以下のように、まず読者に呼びかけ、本書のモットーを掲げている。

セバスティアン・フランクが、キリストに拠り頼む読者に。

内なる人の眼と耳と心によって神の秘めたるパラドクスを聴き、見て、理解するように。

福音とは永遠にして純粋なるパラドクス。

聖書は七つの封印によって閉ざされた本。

聖書の文字、アンチキリストの剣は、キリストを殺す。

霊の光と生命と解き明かし無くば、聖書は死せる文字にして暗き提燈なり。

異端とセクトは聖書の文字から生ず。S. 3¹³⁾

このモットーは第1に、フランクの想定する読者が、キリストに「抛り頼む」キリスト者であり、その人の「内なる」「眼と耳と心」であるということ述べている。「内なる」ということを、別な言葉で言うならば、「霊的」ということになる。第2に、フランクが伝えようとしている「福音」は「パラドクス」であるということである。フランクが述べることが「パラドクス」であるだけでなく、そもそも「福音」すなわち聖書のメッセージが「パラドクス」なのである。第3には、「パラドクス」に満ちた聖書は、「霊」によって理解されるべきもので、聖書の「文字」は、キリストに反対するものであり、「異端とセクト」が生ずる原因となっているということである。これらのモットーは、「序文」を要約している。

「序文」はまず、「パラドクス」がギリシア人において「確実にして真実であるものの、全世界や人間流に生きている者はまったく真実でないとみなす発言」(S. 3)であると、一般的な「パラドクス」の説明からは始めている。「パラドクス」はギリシア語の「パラ」という反対を意味する接頭辞と、意見を意味する「ドクサ」からなるということをフランクもまず説明しているのである。「十字架と受難と悲しみは幸福であり、死は生命に至る道であり入り口である」、「苦しみと悲しみのなかで幸せと思うべきであって、人々に幸福ともてはやされることを不幸とみなし恥ずべきである」などの例があがっている。このような「パラドクス」は、世間の常識とは反する意見としての「パラドクス」であり、修辭的表現としての「パラドクス」でもある。

つぎに、フランクはこのような題名を付けた理由として、「(そのみ神の言葉である)聖書の正しい意味、すなわち神学が、永遠のパラドクスに他ならず、全世界が思っていることや見なしていることや信じていることや敬っていることとは反対に、確かであり真実であるから」(S. 4)と述べる。それは「福音が世であるとか、世が福音を信じ、福音を保ち、福音を受け入れているとか」考えられないとするからである。フランクは「福音」と「世」が鋭く対立していると考え、この考えは『パラドクサ』の全体を貫いている。「福音」と「世」の対立は、旧約聖書と新約聖書において語られており、新約聖書のイエスや弟子たちは「世」に迫害され、イエスは十字架にかかったのだが、フランクによれば、聖書成立以後のキリスト教史、すなわちキリスト教を「国教」、社会の主流の宗教とするヨーロッパ社会、そしてキリスト教を標榜するフランク自身の時代の「世」も、この世的なあり方に都合の良い「善良で恵み深い、肉的な神」を崇めて、ほんとうの「福音」に対立していることになる。

フランクによれば、

福音が世であるとか、世が福音を信じ、福音を保ち、福音を受け入れているとか、考えるべきでない。世の使者たちはすべて、[世から見れば]愚かな、前代未聞のこのパラドクスのゆえに、異端やいかさま師とみなされて滅びなければならなかった。S. 4.¹⁴⁾

旧新約聖書のなかの、神に従う人々やイエスと彼に従う人々が、同時代の「世」から迫害されただけでなく、キリスト教が国家や社会の支配的宗教としての位置を確立しするなかで、キリストに従う人々が、「世」から排除されてきた。それは、「世」、世間、人間社会というものが、人間の欲望、権力欲、支配欲、物欲、名誉欲、また力に支配される傾向を不可避免的にもち、「福音」に原理的に対立するからである。「世」と「福音」の対立の根には、フランクにおいては、「肉」と「霊」の対立がある。口先では「神」をとさえつつ、心の底では「神などない」と考えていることがある（S. 4、詩編14編参照）。

序文は、次に聖書の問題について語る。「世」は聖書を「理解しない」（S. 5）。その理由の一つは、フランクによれば、聖書の語り方にある。すなわち、聖書は、「特別な言語」、特別な語り方をしているからである。「譬え Gleichnis」、*「寓意的にもちいられた言語 allegorisch verwendete Sprache」*、「寓意 Allegorie」、「なぜ Rätsel」「パラドクス」などの修辞手段が、「文字という幕」となり、「神の秘密」が「神無き者たちには隠されていて、神の子らだけが受け取るようになるため」であるとされる（S. 5）。マタイ福音書13章10～13節やピュタゴラスが参照されている。「霊 Geist とキリストの心 Gemüt と聖書の理 Verstand」は聖書の文字の奥に隠されているとフランクは考えている。（S. 5）。

フランクが『パラドクサ』という聖書理解をめぐる本を書いたのは、ルターに代表される宗教改革運動において、「聖書のみ」という原理、すなわち聖書理解に基づき、聖書を第一の根拠とするという原理が確立されていくということ、また聖書が民衆語に訳されて、それが印刷により広まり、神学教育を受けた聖職者だけでなく、一人ひとりの普通の人々が聖書を直接読む道が開かれ、そこから多様な聖書理解が多様なグループを生むという時代の中にいるからである。フランクは、「聖書の文字」をめぐる、正統と異端が生じ、そこから争いが生じるという時代状況を鋭く意識して『パレドクサ』を執筆している。

フランクは、聖書の「文字通りの理解」に反対するとき、キリストが旧約聖書の「文字によって死へと追いやられた」ということ、キリストが「聖書の文字によって」殺された、という例をあげている（S. 7）。「律法」の「文字」の解釈により、キリストは十字架にかかることになったというわけである。

序文においてもフランクは、聖書を「死せる文字」に従って理解するとき、様々な「異端」や「セクト」が生まれるという、宗教改革時代の状況を語っている（S. 6）。フランクは宗教改革時代のさまざまな急進派のなかに、「愚かな熱意 ihren törichten Eifer」、*「時宜を得ぬ熱意 unzeitiger Eifer」*を見ている（S. 13f.）。

これに対して教会を形成していこうとするいわゆる「正統派」は、「信仰告白」「信条」により、教義を固めていく。フランクは、「神の言葉が……あらゆる土地で一致して説かれ、同じ言葉によって回心し、同じ言葉を信じ、同じ言葉を喜んで受け入れるように」するためにとられる「さまざまな道や手段や方策」（Pr. 279/280, S. 431）、すなわちたとえば「アウクスブルク信仰告白」のようなことに懐疑的であり、そのことも、聖職者となることを断念した理由になっている。ただ、フランクは、文字として書かれた「同じ言葉」に基づく信仰に「聖霊の果実」が続くべきことが「考慮されていない」、信仰が「生命」となって、人のなかで力強く働いて「証し」となっ

て行為として出て行かないのではないか (S. 431), ということから、懐疑的になっている。

「文字」に対してフランクがよりどころとするのは、「霊」である。「キリストと霊の意味 Der Sinn Christi und des Geistes, それが私たちの心 Herz のなかで文字を生かし、解き明かし、応用するとき、それのみが、神の言葉であり、生かす」(S. 8)。

「霊的」ということは、フランクによれば、「肉」や「時や所や人や法やエレメント Zeit, Raum, Person, Gesetz und Element」や「物 Ding」に結びついていないということである (S. 10)。フランクは歴史書や世界地理書を書いているが、歴史や地理を広い視野で知ること、[「時」や「所」を相対化することになる。「人 Person」というのはこの場合、人のこの世での役割、たとえば聖職者であること、身分、職業などをさす。聖職者であることが、すなわち「霊的」であるというわけではないことになる。「法」や「律法」も「文字」であり、そのようなものとして、絶対的なものでなく、人がある時、ある場所で表現したものとして相対的なものとなる。「エレメント」というのは、地水火風という自然の四大をさし、地上的自然という条件のことである。

聖書の「霊的理解」ということからフランクは、〈霊的な教会〉や〈見えざる教会〉を強調し、「非党派的キリスト教」を主張する¹⁵⁾。

神の言葉の上に自由に霊の中で立ち、眼でなく、信仰によってつかまれ見ることのできる、自由で非セクト的で、非党派的なキリスト教だけが、神に由来する。

Allein das freie, unsektische, unparteiische Christentum, das an der Dinge keines gebunden ist, sondern frei im Geist auf Gottes Wort stehet, und mit dem Glauben, nicht mit den Augen begriffen und gesehen werden kann, ist aus Gott. S. 10f.

この「非党派的キリスト教」は、フランクによれば、さまざまところに「散らばっている」。フランクはマタイ福音書13章24～30節の麦と毒麦のたとえを引いて、終末に至るまで善と悪はこの世において「並んで beieinander」存在している、また、ルカ福音書21章24節を引いて、「エルサレムは異教徒の只中に散らばっている Jerusalem mitten unter den Heiden zerstreut liegen」と述べ、教会から分離したり、セクトを打ち立てたりすることを否定する。フランクの考えによれば、「みなそれぞれそのいるところで、独りで、敬虔でありうる Ein jeder kann für sich selbst wohl fromm sein, wo er ist」(S. 11)。「聖霊」は、「聖霊に属す die Seinen」「人々の良心と心のなかで世界中において in ihrem Gewissen und Herzen in aller Welt」(S. 11)、働いている。

フランクによる〈見えざる教会〉とは、以下のように言い表される。

神から生まれた、キリストのあらゆる肢体からなる、一つの霊的な、見えざるからだ ein geistlicher, unsichtbarer Leib aller Glieder Christi, aus Gott geboren, und in einem Sinn, Geist und Glauben S. 11.

聖霊によって神の平和のうちに愛の絆で結び合わされた、世界中の真に神を敬う、善良な

新しい人々の集まりや共同体

die Versammlung und Gemeinde aller recht gottesfrommen und gutherzigen, neuen Menschen aller Welt, durch den Heiligen Geist in dem Frieden Gottes mit dem Band der Liebe zusammengegürtet S. 12

フランクは、このような「共同体Gemeinde」や「集まりVersammlung」や「聖徒の共同体Gemeinschaft aller Heiligen」や「教会Kirche」を信じ、みずから「このなか、これとともにいる」と語る (S. 12)。フランクは自分がこの中にいることを「確信」しているが、「霊的な教会」はこの世に具体化された特定の存在ではないので、だれが「霊の教会」に属すかは、「神のみぞ知る」ことである。そこから、敵対しない人、「神を熱心に求め、尋ね、裁きと正義を行う人」、「神を畏れ、正義を行う人」はすべて「わたしの兄弟」であり、「弱さゆえにあるときに誤り、躓き、罪を犯す人々」をも、兄弟と見なす、という寛容な態度が出てくる。フランクは、このような人々が自分自身の誤りを「私の誤りを目の前の鏡に見るように」映すものであるとみなし、彼らのために願ひこそすれ、「裁きはしない」と述べている (S. 12)。

フランクが『パラドクサ』を書いたのは、読者である「霊的な」人がみずから「吟味し」、「すべてを自由に検討」するためである。

私たちは私たちの神の前にあって、畏れをもち注意深く歩むべきであり、おそれおのきつつ、私たちの救いを完成し、すべての物事をより良く熟考し、神において哲学すること論争すること明晰さをいや増していくことを止めずに、日々判断力を磨き、改善し、キリストを認識することにおいて完全な人間へと成長し豊かになるべきであって、キリストの名前が失われることのないようにすべきである。S. 14.

フランクは『パラドクサ』を逆説的命題集として、命題とその解釈の断片的集成として、読者に投げかける。他者を「打ち負かしたり」、他者に「噛み付いたり」「突き刺したり」攻撃するためでなく、ある教説を述べるためでもない (S. 13)。逆説的命題とその解釈の試みは、フランクのこの姿勢にかなった著作スタイルとなっている。

フランクによれば、「真理は、逆説からなり」、世間が見なし、行い、語り、信じていることとは異なる。たんなる見かけでない真理は「ただ神のみが所有している」(S. 15) のであるが、その真理を求める人は、「畑を深く掘り、この世から出て、遠く自分自身の中へと旅するように」(S. 15) と言われる。それには、「労苦と労働、自己否定と献身、自分自身の魂や生命を憎むことを代償として払わなければならない」(S. 16)。

フランクは『パラドクサ』本文最後の命題の説明において、「神の言葉」は「自分自身の内において、自己を棄て、すべてを委ねてin sich selbst gelassen, 静かに聴き、感ずる」ことができる人において受けとめられるものだ、と語る (Pr. 279/280, S. 429)。タウラーや「ドイツ神学」のゲラッセンハイトGelassenheitが、フランクの「霊的」ということや「内なる」ということにとって重要な態度となっている。「神の言葉は風であり、霊であって、その息吹

きはすべてを委ねた静かな魂の底im Grunde der gelassenen stillen Seelenにおいて聴かれるのであって、どこから来てどこへ行くのか、誰も知らない」(S. 429)。フランクは「一人ひとり、神に教えられて、何よりも自分の心という本を読」むということ、「そのあとで」、聖書とあらゆる証人の書物を、「教説Lehre」でなく、「証しZeugnis」として読むべき、とする。説教も、「証し」、「想起Erinnerung」、「指し示すものZeiger」、「教示Weisung」、「私たちの内なる宝である光の影Schatten zu diesem Schatz und Licht in uns」として位置づけられる。個人の「心Herz」や「心情Gemüt」と呼ばれる内面性が、文字としての聖書よりも根源的な本とされている。そしてその「人の中」の「神の言葉」の「証し」は、「聖霊の果実」すなわち人の行いとなって表れるとされる (S. 431)。

4. おわりに

フランクの時代は宗教改革が始まった時代であり、ヨーロッパの近代初頭にあたる。キリスト教はヨーロッパの宗教であり続けるが、西ヨーロッパでは、ローマ教皇を頂点とするカトリック教会の外に、複数の新たな教会が地歩を固めていく。フランクは、プロテスタントのなかで、「ルター派」「ツヴィングリ派」「洗礼派」とは区別される「第四の信仰」として、「非党派的なキリスト教」を訴えた。

その「非党派的なキリスト教」の根拠となる、「神」や「霊」の理解は、タウラーや「ドイツ神学」などを経て、キリスト教神秘思想の流れにつながっている。本稿では、この内容について十分に検討することはしていない。

フランクの「神」や「霊」の理解は、フランクの歴史書や地理書、ことわざ格言集などの執筆活動として表現される。タウラーや「ドイツ神学」につながる神秘思想のゆえに、この世界の歴史や地理が研究され、この世界の時や場所が相対化される。異文化やキリスト教以外の宗教も、視野に入ってくる。歴史や世界が、神秘思想と関係させられ、このことは、のちのヴァイゲルやヤコブ・ベームの思索に生かされていく。この流れは、18世紀になると「敬虔主義」をとおして、ヨーロッパ社会全体に知られるものとなる。

21世紀の現代は、かつてのキリスト教文化圏と世界中で「世俗化」が進んだ時代である。また、従来キリスト教文化圏ではなかった地域に、キリスト教が広まった時代でもある。

フランクの16世紀とは異なる時代状況の中、フランクのような思想家の著作を現代の日本で読む意味を自問自答しつつ、さらに研究を進めていきたいと思っている。

使用テキスト：

Franck, Sebastian: Paradoxa ducenta octoginta. Ulm[1534]. 故岡部雄三氏のコピー(Wolfenbüttel Herzog August Bibliothek)。

Franck, Sebastian: PARADOXA. Herausgegeben und eingeleitet von Siegfried Wollgast, 2., neubearbeitete Auflage. Berlin (Akademie Verlag) 1995. (本書は、1542年版の現代語訳。本稿はこのテキストに基づき、上記の1534年版を適宜参照、パラドクスの番号をPr.で略記する。)

Franck, Sebastian: Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe mit Kommentar. Bd. 1. Bern, Berlin, Frankfurt a. M., New York, Paris, Wien (Peter Lang) 1993. (SW, Bd. 1と略記する。)

参考文献：

『ドイツ神学』（山内貞男訳）創文社 1993年。

Kaczerowsky, Klaus: Sebastian Franck. Bibliographie. Verzeichnisse von Francks Werken, der von ihm gedruckten Bücher sowie der Sekundär-Literatur. Mit einem Anhang: Nachweise von Francks Briefwechsel und der Archivalien zu seinem Leben. Wiesbaden (Guido Pressler) 1976.

倉塚平『異端と殉教』筑摩書房 1972年。

Wollgast, Siegfried: Einleitung des Herausgebers. In: Franck, Sebastian: PARADOXA. Herausgegeben und eingeleitet von Siegfried Wollgast, 2., neubearbeitete Auflage. Berlin (Akademie Verlag) 1995.

Wollgast, Siegfried (Hrsg.): Beiträge zum 500. Geburtstag von Sebastian Franck. Berlin (Weidler Buchverlag) 1999.

安酸敏眞「セバスティアン・フランクの根本思想——スピリチュアリズムと歴史認識——」, 『聖学院大学論叢』第15巻第2号（2003年）343-363頁。

安酸敏眞「セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義」, 『北海学園大学人文論集』30（2005年）35-70頁。

注

- 1) 本稿は、『キリスト教神秘主義著作集 第12巻』教文館, 2013年刊行予定, のための予備的研究を兼ねている。
- 2) フランクの生涯については, 倉塚平『異端と殉教』87-126頁, 参照。Vgl. Wollgast, Siegfried: Einleitung, S. VII-XXI. Wollgast, Siegfried: Beiträge, S. 13f.
- 3) Wollgast, Einleitung, S. 13.
- 4) Franck, Sebastian: SW, Bd. 1, S. 304.
- 5) 『歴史聖書』については, 「スピリチュアリズム」ないし「神秘思想」と「終末論」を扱った安酸敏眞の研究（参考文献）を参照。
- 6) 岡部雄三『ヤコブ・ペーメと神智学の展開』291-311頁, 参照。
- 7) Wollgast: Einleitung, S. 14.
- 8) 倉塚平, 109頁。ほかに, メルヒオール・ホフマン (Melchior Hofmann, 1500頃-1543), ミュンスター千年王国のベルント・ロートマン, ミカエル・セルヴェトゥス (Michael Servet, 1511-1553) らがいた (倉塚平, 108-109頁参照)。
- 9) 倉塚平, 121頁。
- 10) 倉塚平, 118頁。
- 11) 倉塚平, 43-86頁, 参照。
- 12) ルターはこのテキストを1516年に『靈的に高貴な小冊子』として出版, そののち1518年に書名を『ドイツ神学, すなわちアダムとキリストとは何であり, またいかにしてアダムがわれわれにおいて死に, キリストが蘇りたまうべきか, その正しい理解についての高貴なる小冊子』とした。山内貞男「訳注」, 『ドイツ神学』173頁。

- 13) 『パラドクサ』のテキストは、「使用テキスト」の Wollgast の現代語版により、頁を S. で示し、パラドクス命題を Pr. で略記する。ラテン語は省略する。
- 14) [] は筆者（中井）の補足。以下、同じ。
- 15) 〈 〉 は筆者（中井）の強調。

Christianity as Paradox: Sebastian Franck's "Paradoxa"

NAKAI Ayako

Sebastian Franck (1499/1500-1542) wrote his Christian philosophy in his book "Paradoxa", "280 paradoxes or wondrous sayings" in the period of the Reformation. For him the Gospel, the message of Christianity, is "paradox" for the "world" as Paul writes (I Cor., 1, 23). Furthermore, the Bible is full of "paradoxical", contradictory messages and written also in a paradoxical style, which means that it is written in figurative expressions, metaphor, parable, symbol and allegory. Franck emphasized that one must read it not according to "letters", but read it "spiritually" in order to understand its true meaning.

Franck's understanding of the "Spirit" is influenced by Tauler and "Theologia deutsch". His concept of "God" is in the tradition of Christian mysticism. "Gelassenheit", self-denial and total dependence upon God, is important for him while judgment by reason, independent of human authority, is indispensable.

From a mystical understanding of the Gospel, Franck conceived the idea of an invisible spiritual church, in which members are dispersed to different places and churches. This idea influenced philosophers like Valentin Weigel and German Pietism.

Key words: Sebastian Franck, "Paradoxa", paradox, Bible, German Mysticism

青山學院女子短期大學

紀 要

第六十六輯

平成24年12月 刊

JOURNAL
OF
AOYAMA GAKUIN
WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

NO. 66

DECEMBER, 2012

目次

鬼束ちひろ論

――鬼束ちひろの表出史における第11シングル作品〈育つ雑草〉の位置

..... おかざきかずお 1

正義・福祉・愛

――代理出産から「法の正しさ」を考える

..... 河見 誠 15

パラドクスとしての福音

――セバステイアン・フランク『パラドクサ』をめぐって

..... 中井 章 子 27

英語受動態の補文節主語

..... 湯 本 久 美 子 39

総力戦の文化史とフランス革命の世界史的位置

——文化史の危険性と可能性——

.....西願広望.....65

定時制高校での教育相談、スクールカウンセリングにおける今日的課題

.....田中志帆.....79

20世紀ロシア子ども史研究の意義

——ケリーの著書をめぐって（上）——

.....村知稔三.....93

アクション・リサーチによる子どもが自由にのびのびと楽しんで

動きをつくりだす身体表現の授業研究

.....渡部かなえ.....107

青山学院女子短期大学研究成果一覧.....117

CONTENTS

OKAZAKI Kazuo

- A Research on the Position of <Sodatsu Zassou>
("The growing weed") in the Poetical Works written by Chihiro Onitsuka 1

KAWAMI Makoto

- Justice, Welfare, and Love
— Examination of "Jus" through Parental Surrogacy 15

NAKAI Ayako

- Christianity as Paradox: Sebastian Franck's "Paradoxa" 27

YUMOTO Kumiko

- Complement Subjects in English Passive Construction 39

SEIGAN Kôbô

- The Cultural history of total war and the French Revolution Reconsidered in World-
historical perspective
— The risk and the potentiality of Cultural history 65

TANAKA Shiho

- Contemporary Problems with School Counseling and Educational Consultation at
Night High School 79

MURACHI Toshimi

- Review on History of Childhood in Russia in the 20th Century (Part 1) 93

WATANABE Kanae

- Action Research of a Joyful, Free, Imaginative, and Creative Dance and Performance
Class for Children 107

編集委員

清水 康幸

鈴木 直子

松村 伸一

宮田 雅智

浅見 均

執筆者（五十音順）

岡崎 和夫 教授

河見 誠 教授

西願 広望 准教授

田中 志帆 准教授

中井 章子 教授

村知 稔三 教授

湯本 久美子 准教授

渡部 かなえ 教授

平成二十四年十二月一日発行

青山學院女子
短期大學紀要 第六十六輯

編集
発行

青山学院女子短期大学
東京都渋谷区渋谷四ノ四ノ二五

印刷
丸善株式会社